

第 123 回 東京都大田区と品川区の銅像探索

筆者：林 久治（記載：2020年6月15日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気俎な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」という意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいますので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

私は1月2日に大田区で銅像探索を行い、その探索記を [112 回の記事/f](#) と [113 回の記事/f](#) に記載した。その後、大田区馬込のリコー本社に市村清像があることを見つけた。本像は、[1\) のサイト/](#) に未収録なので探索を計画していたが、そのうち武漢肺炎が流行し外出を自粛していた。最近、流行が少し下火になったので、銅像探索を再開している。それ故、6月11日に市村像の探索をすることとした。馬込駅の近くの戸越公園駅傍（品川区豊町）に珍しい銅像があることも発見したので、こちらにも探索した。本稿はそれらの探索記である。なお、本稿においては、資料の記述を **緑文字** で、私（林）の意見や説明を **青文字** で記載する。

図 1 に、リコー本社（東京都大田区中馬込一丁目 3 番 6 号）の周辺地図を示す。



図 1. リコー本社の周辺地図 本図は、[2\) のサイト/s](#) より借用。

①市村清像の設置場所、②公益財団法人市村清新技術財団。

(2) リコー本社の市村清像

都営地下鉄馬込駅を下車し、環七通りを西に数分歩くと、リコー本社の立派なビル群が並んでいる。その中で、図1の①の地点に前庭があり、その木立の中に銅像が設置されていた。それらの写真を図2に示す。



図2. 上：リコー本社、下：前庭に設置された市村清像。

本社ビルの玄関入口に守衛のオジサンが居たので、私は彼に私の名刺を見せ、「私は理研に勤めていた者ですが、市村先生の銅像を拝見してもよろしいでしょうか?」と依頼した。彼の上承を得て、私は市村像を撮影した。図3上に市村像を、図3下に台座の銘板を示す。銘板には敬称が記載されておらず、それ以外には碑文の類は何も設置されていなかった。



図3. 上：市村清像、
下：台座の銘板。

[3\) のサイト/1](#)には、市村像の設置経緯が次のように書かれている。

①1969年12月16日、リコー大森本社玄関前——。この日、市村と生前親交のあった政界、財界、学界、芸能界の名士、近親者、リコー三愛グループ各社代表約100名が出席し、市村の銅像除幕式が行われました。——ちょうどこの一年前、リコー三愛グループの総帥だった市村が逝去し、社員一同、落胆の日々を過ごしていました。それまで社員を守り会社に尽くしてきたグループの大黒柱を突然失ってしまったわけですから、皆の悲しみも相当だったことでしょう。

②そんな中、在りし日の市村を思い出し、その姿を見て士気を鼓舞するために“自分たちの手で市村の銅像を作ろう”という声がどこからともなく沸き起こり、瞬く間にグループ全社の社員間に伝わりました。そこで、さっそく市村の銅像建立への寄付を呼びかけたところ、募金者はおおよそ14,600名にも及びました。当時のリコー三愛グループが24社・社員数15,000名程だったことを考えると、いかに多くの社員が関心を寄せ賛同したかが分かります。

③銅像の製作は、佐賀県出身で市村とも親交があり、日本芸術院会員でもある古賀忠雄氏が手掛けました。社員がいつも見慣れた市村の姿ということで、愛用の椅子に掛けた座像に決まり、本体はブロンズ製。台座は朝鮮の万成石（まんなりせき）を用いています。ちなみに、古賀氏による市村の銅像は、この他に市村清新技術財団、市村記念公園（生家跡）、市村記念体育館にも置かれています。なお、台座正面の『市村清像』という表示は、市村が最も尊敬していた石坂泰三氏（第2代経団連会長）の揮毫によるものです。

④1969年12月16日——。幸恵夫人による除幕で布に包まれた状態から椅子に掛けた市村の姿が現れると、会場からは一斉に拍手が起こりました。そして、市村亡き後を継いだ三愛会・館林会長は、市村の銅像に向かい『余計なことはするなど叱られるかもしれないが、今度だけは許していただきたい。毎日、社長にお会いすることができるのですから…。これからはずっと見守っていただきたい』と挨拶を述べると、思わず涙ぐむ参列者も見られたそうです。

市村清氏の経歴は、次の資料に詳しく記載されている。

①日経新聞が、政・財・文化・スポーツなど各分野で功成り名を遂げた人物による連載として1956（昭和31）年3月1日から掲載を始めた「私の履歴書」。市村清も122番目の執筆者として1962（昭和37）年2月21日から3月20日までの28日間にわたり登場しました。本書の内容は、[4\) のサイト/1](#)に収録されている。

②市村清氏の実弟・市村茂人氏（1914-2013）が書かれた本：起業の神様—市村清の実像（中経出版、1995/6/1）

③市村家（リコー創業者・市村清・市村茂人の家系図）：[5\) のサイト/](#)

④市村清新技術財団紹介動画（市村の生涯も紹介）：[6\) のサイト/](#)

⑤市村清の年譜：[7\) のサイト/1](#)

ウィキペディア（市村清）によれば、市村少年は名門・佐賀中学校（現・佐賀県立佐賀西高等学校）に入学するも、経済的困窮により2年で中退を余儀なくされた。その後、色々な職を転々。市村青年が飛躍の契機となったのは、1929年に縁あって理化学研究所（理研）が開発した陽画感光紙の九州総代理店の権利を譲り受けたことである。たちまち業績拡大に成功し、これが後のリコーに発展したのである。

私は、「一介の青年に過ぎない29才の市村が、如何にして天下の理研から九州総代理店の権利を得られたのか？」との疑問を持った。その答えは、市村の「私の履歴書」（[4\) のサイト/1](#)）にあった。市村は次のように書いている。

①私（市村清）は上京して働きながら中央大学専門部法科（夜学）に入学した。しかし、1922年に日中合弁の「大東銀行」に入社するため大学を中退し、北京に渡る。昭和金融恐慌のため、1927年に大東銀行は閉鎖される。帰国した私は富国徴兵保険（現・富国生命保険）のセールスマンとして再出発した。赴任先の熊本で最初は大変苦労したが、抜群の成績を上げるようになった。私は、全国一の賞と社長から記念の軸物を送られ、富国生命の伊豆凡夫専務が福岡支部に来て私を呼び、故郷・佐賀県の監督になるよう依頼された。

②富国生命の佐賀代理店主は吉村という醸造業者だった。相当な資産家で当時の佐賀商工会議所の会頭もしていたが、また日本で初の女博士になった理化学研究所の黒田チカさんの実弟（**実兄の誤り**）である関係から、理研感光紙の九州総代理店も兼営していた。保険募集の仕事も故郷でやってみると、旧知が多いから成績もぐんとあがり、その契約をまとめては吉村さんのところへ持っていくうちに、昵懇になった。

③ある日、吉村さんが私に感光紙の外交をやってみないかと言い出した。保険の外交よりも天下の理研の発明品を売るのだから、私もだいぶ心が動いたが、吉村さんという人はたいへん金に細かい人なので、すぐには話にのらなかった。ところがしばらくして、ある夜養子の勉さんが私の所に来て「感光紙の売れ行きは非常に悪い。いまの成績では五月の満期にはおそらく解約になるのではないかと思う。外交員もいつかないし、実際は父は焦っているんだ。いまあなたが望めば議るのじゃないか」と言った。

④そこで、私は理研の意向を聞くために上京して、理研の製造販売機関である理化学興業株式会社の稲垣支配人に会ってみると、はたしてケンもホロロのあいさつであった。この人は大河内正敏先生の異母弟であった。私はどうせだめなラと思ひ、「いったいこのカタログにはなんと書いてあるのですか、これ以上のものはないと書いてあるじゃないか。それが売れないというのは携わる人の熱と努力がたりないのだ。僕は人のいやがる保険募集でも成功した。仕事の熱意と努力では人に負けないつもりだ。理研は商品も開発するから人材も登用するのかもしれないと思たら、とんだ見そこないでしたよ」と大声を出しているところへきたのは常谷感光紙課長であった。常谷さんは私の熱意を感じとってくれたのだろう、けんか別れになりそうな支配人との折衝を引き取ってくれた。私も気を直して再び決意を聞いてもらい、当分は吉村商会の名で仕事をやり、成績があがれば改めて考慮しようという約束をもらって帰郷した。

⑤私は妻や弟を力に、福岡の住宅地の裏通りに「理研感光紙九州総代理店」の看板を掲げた。名義は吉村商会であったが、初めて自分の店を持った感激に私は燃えていた。向こう三年間は酒もタバコもやめ、マージャン、映画、碁将棋などいっさいの娯楽を排することを誓い、外交もやれば荷造り、配達もやる。妻はお手伝いさん兼事務員だ。保険募集という仕事で苦労しているから、商売は実に楽しい。最初の半年間は名もろくに知られていない店だから苦労したが、半年目からは毎月幾何級数的に売り上げがふえ出した。

⑥そうなるに妻と二人ではとても仕事はさばき切れない。小僧さんを雇わねばならなくなった。当時の使用人は高等小学校卒の十六歳で住み込み五円ぐらいが相場だった。初めて自分で人を使う立場になったとき、私はいろいろ考えた。私のように特別の学歴も人のつながりもなくやってきたものが、今後伸びようとするには、結局従業員が心からの協力をしてくれるかどうかにかかっている。そのためには、彼らの待遇を物質的にも精神的にも他より優遇してやる必要がある。そこでまず給料は思いきってよそより六割高の八円にする。二割や三割では高いという印象がない。それでも小僧さんを三人雇うとして月九円の節約をすれば足りるのだ。妻はびっくりしたらしいがとにかく納得した。

⑦精神的優遇というのはこうだ。私は店員をどんなに若くても「××君」と呼び、妻には「××さん」と呼ばせた。使用人ではない、仕事の協力者という扱いである。食事も三食とも皆でいっしょにする。私は少年のころ伯母の家で、食べ物の差別に苦しんだことも決して忘れていなかった。食事の点だけは、妻は猛反対して、「たまにはあなただけにタイ

のさしみでもつけたい」などと言ったが、私は承知しなかった。彼らへの愛情は、子供に対する愛情をもってしなければ不徹底だと思ったからである。

⑧これで彼らが働かないはずはない。店主もその細君も皆一心同体なのだから。はたして彼らはほかでは見られない働きを示し、注文もふえ、するとまた店員もふやすというように伸びて、1933年ごろには約五十人の大世帯となっていた。店そのものもすでに吉村でなく、私の名で九州総代理店となり、同時に朝鮮と満州の総代理店ももらった。あとで調べてみると、この時代の私の店の成績は全く群を抜いたものだった。他の代理店主からはよく「市村さんは実に店員の運にめぐまれていますね」などと言われたが、それは運ではなかったのである。

有名な黒田チカ博士（1884-1968）は独身であったので、その実兄の吉村氏が黒田家から吉村家に養子に入ったのであろう。事実、[8\)のサイト/1](#)には次のような記載がある。「維新期の当主は、吉村善次であった。彼は婿養子として、黒田平八の次男、吉郎（1875-1942）を迎え、4代目当主とした。」

以上の資料より、市村像の概要は次の通りである。

市村清像

場所：東京都大田区中馬込 1-3-6 リコー大森本社玄関前庭

建立時期：1969年12月16日（一周忌に社員の募金で建立）

制作者：古賀忠雄（1903-1979、佐賀市出身、東京美術学校卒）

設置経緯：市村清氏（1900-1968）は佐賀県三養基郡北茂安村（現・みやき町）出身。佐賀中学、中央大学を経済的理由で中退。1929年、縁あって理化学研究所（理研）が開発した陽面感光紙の九州総代理店の権利を譲り受け、たちまち業績拡大に成功。これが後のリコーとなる。1942年には理研産業団より独立。リコー三愛グループはじめ二百数十社を起業。高度成長期のスター経営者、別名「経営の神様」と言われ、東急の五島昇、ソニーの盛田昭夫はじめ、「市村学校」に通って学んだ上場企業の経営者は数多い。亡くなる直前に財団法人（現・公益財団法人）新技術開発財団の設立認可が下り、同財団では市村の遺志を継ぎ、科学技術の分野で学術、産業の発展に貢献した個人・団体を表彰する市村賞を運営している。

なお、市村が創業した有名企業やヒット商品は次の通りである。

創業企業：リコー、三愛（1963年、銀座4丁目交差点に三愛ドリームセンターを建設）、西銀座デパート、三愛石油（羽田空港の給油権）、明治記念館（結婚式場の草分け）、日本リース（リース会社の先駆け）、リコーエレメックス（高野精密工業を再建）、日米飲料株式会社（コカ・コーラの北九州地区の販売権）。

ヒット商品：リコーフレックス III（1950年に発売と同時にリコーブームが起き、その後の二眼レフ全盛時代へと進む。カメラの大衆化に大きな役割を果たす。）、リコピー（1955年に発売。1960年代までのジヤゾ式複写機の全盛期には、湿式・半湿式の何れに於いても、寡占的とまでいえるシェアを持っていたため、複写機または複写のことを「リコピー」と呼ぶ人が多かった。）、リクオーツ（クオーツ時計のシリーズ）。

[3\)のサイト/1](#)によれば、市村清像は市村清新技術財団にも設置されているそうなので、私はリコー本社から近所にある市村清新技術財団（図1の②）に行ってみた。その写真を次ページの図4に示す。ここは、市村氏の自宅があった所である。しかし、ここの館外には銅像はなく、館内は閉まっていた。それ故、私はここの銅像探索を諦めた。



図4. 市村清新技术財団の建物（図1の②地点）

(3) 品川区の水木弘圓像



図5. 東急大井町線戸越公園駅の周辺地図 本図は、[9\) のサイト/W](#)より借用。

市村像の探索を決めてから、その付近に面白い銅像があるかどうかを調べた。その結果、[10\) のサイト/](#)で、品川区豊町4丁目2-16にある三吉稲荷大明神の境内に水木弘圓像があることを見つけた。本像は東急大井町線戸越公園駅の近くにあるので、市村像探索の後、戸越公園駅に回って本像を探索した。当駅の周辺地図と三吉稲荷大明神の位置を図5に示す。

ネット上では、本大明神の由緒や水木弘圓女史の経歴は、全く記載されていなかった。私は「現地に行けばそれらの情報が分かるかもしれない」と思い、ともかく行ってみた。戸越公園駅の出口1から街に出て、駅前の蛇道をくねくねと行くと、三吉稲荷大明神に到着した。その写真を図6に示す。本図が示すように、住宅街の片隅に、三吉稲荷大明神、老婆の座像、および地藏堂が並んでいた。しかし、これらの説明書は全く掲示されていなかった。



図6．三吉稲荷大明神、老婆の座像、および地藏堂

老婆の座像の写真を、次ページの図7に示す。台座の正面には「水木弘圓師壽像」との銘板が貼られていた。本像の周りは大変狭く、背面や左右の面に回れなかった。ただ、台座の向かって左側に碑文が貼ってあった。それは直接には見えないので、私はカメラを隙間に差し込んで、碑文を撮影した。その写真を、10ページの図8に示す。その碑文には、次のように書かれていた。

頌 水木弘圓師は生まれながらの強烈な求道心と実践者で神佛の靈感を体得された偉大なる僧侶であり 密教秘伝の灸術によつて私共を救済せられ日々是れ好日の明るい楽しい暮らしに御導きくだされ師は今尚自ら徳の不足なりとし断食祈願の行を積まれ我等に大いな

る御加護と力を与へてくださる誠にありがたいお方でございます 今秋弘圓師は既に七十七歳の喜寿を迎えられ益々御健康で□化せられ我等信者の大いなる喜びであり茲に喜寿を祝福しその威徳を永遠に敬慕する為に寿像の建立を計画し日頃御指導を受けている者せめてもの御恩報じに浄財相募り寿像の製作を彫塑家高村泰正先生に依頼し建立贈呈し永久に之を記念するものであります 合掌

昭和四十一年十一月吉日 水木弘圓師寿像建立

世話人代表 原米蔵 和田小浪 横関数市 土屋孟雄 浅田吉蔵 中村智世尼 米原さい子
子 律師 水木智孝 権律師 水木智満 制作者 彫塑家 高村泰正



図7. 水木弘圓師壽像

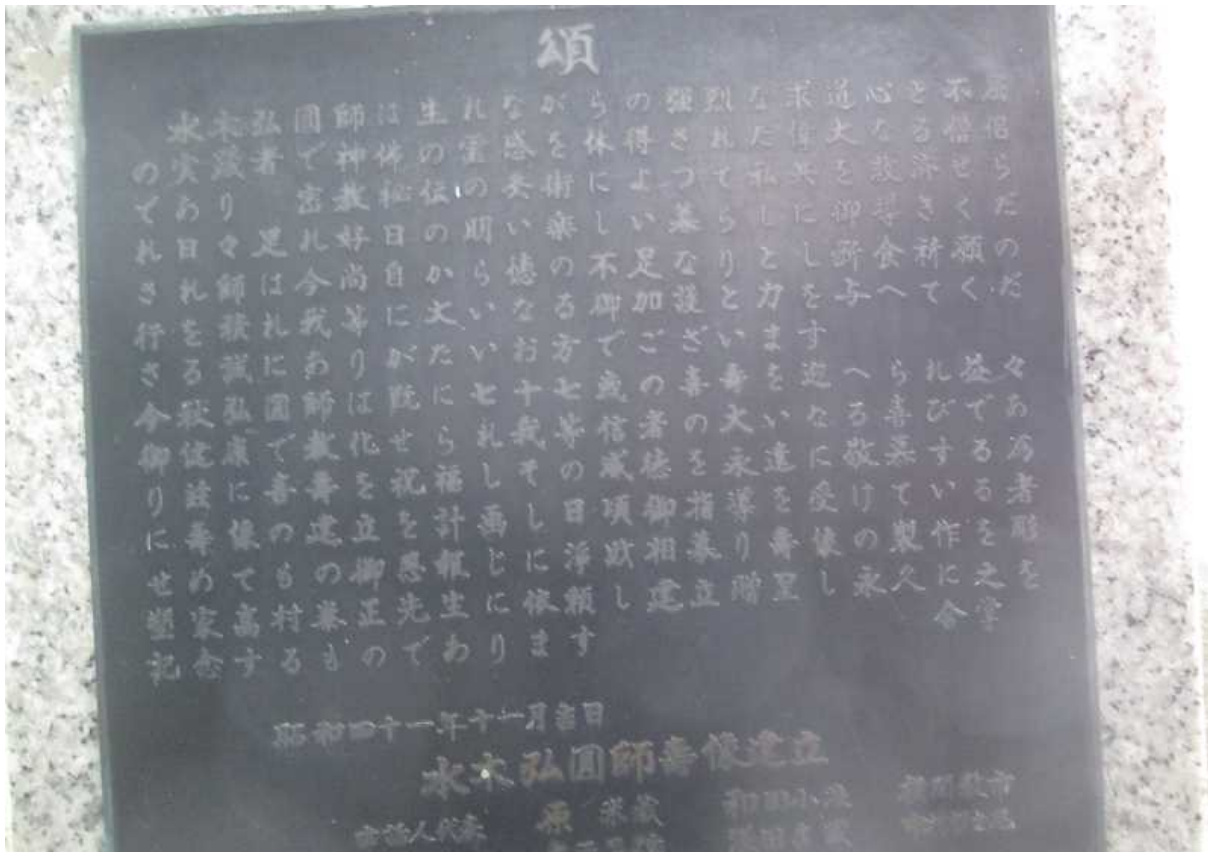


図8. 台座の向かって左側に貼られていた碑文

私は帰宅して、「水木弘圓師」をネットで検索したが、生年、没年、経歴などの情報は全く無かった。6月12日に、自宅近くの練馬区立の図書館に行って、人名事典でも調べてみようかと思った。しかし、図書館の書架には立ち入ることが出来ず、すげすげと帰って来た次第である。今後、図書館が利用できるようになれば、更に調査を続ける予定である。以上の資料により、水木像の概要は次の通りである。

水木弘圓師寿像

場所：東京都品川区豊町4丁目2-16 三吉稲荷大明神横

建立時期：1966年11月（喜寿を祝福し建立）、

制作者：高村泰正

設置経緯：水木師の生年、没年、および経歴は不詳。台座の銘文は以下の通り。「水木弘圓師は生まれながらの強烈な求道心と実践者で神佛の靈感を体得された偉大なる僧侶であり 密教秘伝の灸術によつて私共を救済せられ日々是れ好日の明るい楽しい暮らしに御導きくだされ師は今尚自ら徳の不足なりとし断食祈願の行を積まれ我等に大いなる御加護と力を与へてくださる誠にありがたいお方でございます 今秋弘圓師は既に七十七歳の喜寿を迎えられ益々御健康で口化せられ我等信者の大いなる喜びであり茲に喜寿を祝福しその威徳を永遠に敬慕する為に寿像の建立を計画し日頃御指導を受けている者せめてもの御恩報じに浄財相募り寿像の製作を彫塑家高村泰正先生に依頼し建立贈呈し永久に之を記念するものであります 合掌」

（本文は12ページに続く。）



図9. 上：三吉稲荷大明神、下：水木像の左側にある地蔵堂。

本像の作者の高村泰正は、岡崎の家康像などの有名な銅像を多数制作している。しかし、彼の経歴はネットに記載されていない。私は[114回の記事/f](#)で、大田区山王蘇峰公園・山王草堂記念館の前庭に設置されている徳富蘇峰像の探索記を書いた。ここの徳富像も高村泰正の制作で、出来栄えは大変素晴らしかった。この時、私の調査結果を次のように書いた。

高村泰正は明治 41 年愛知県生まれ。彫刻家を志して高村光雲らに師事。仏像や肖像、裸像など幅広い制作活動を展開。各種展覧会で入選を果たし、作品が皇室に買い上げられるなど、精力的に活躍した。故郷の英雄・徳川家康公没後 350 年祭を記念して昭和 40 年に製作された家康像（愛知・岡崎公園）は氏の代表作としてよく知られている。

図 7 から分かるように、本像の出来栄えも素晴らしく、水木師の強烈な求道心が感じられる。本像の左右にあった三吉稲荷大明神と地藏堂の写真を図 9 に示す。これらの由緒も、ネット上では見つけることが出来なかった。

参考資料

- 1) のサイト：<https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト：<https://jp.ricoh.com/company/directory/office/headquarters>
- 3) のサイト：<http://www.san-ai-kai.jp/ichimura/past/monthly201812.html>
- 4) のサイト：<https://www.san-ai-kai.jp/ichimura/episode.html>
- 5) のサイト：<https://keibatsugaku.com/ichimura/>
- 6) のサイト：<http://www.sgkz.or.jp/outline/>
- 7) のサイト：<https://www.san-ai-kai.jp/ichimura/record.html>
- 8) のサイト：<https://www.sankei.com/region/news/180803/rgn1808030015-n1.html>
- 9) のサイト：<https://mapfan.com/spots/SCAQQ,F66F,G9W>
- 10) のサイト：http://xaymaca3.com/xaymaca3/2020/02/24/%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E3%81%84%E3%81%84%E9%81%93%E3%81%97%E3%81%B6%E3%81%84%E9%81%93_%E8%A5%BF%E5%A4%A7%E4%BA%95%E3%81%AE%E3%82%93%E3%81%8D%E9%80%9A%E3%82%8A/